

■演題8 胃粘膜下腫瘍に対する Inverted LECS with Crown Methods の有用性

代表演者：山本頼正 先生（がん研有明病院 消化器内科）

共同演者：[がん研有明病院 消化器内科] 平澤俊明、藤崎順子

[がん研有明病院 消化器外科] 布部創也、熊谷厚志、比企直樹

胃粘膜下腫瘍に対する Laparoscopy and Endoscopy Cooperative Surgery (LECS) は病変切除を最小限の範囲で行うことを目的とした手技である。LECS 原法は、胃壁を穿孔させた後、胃粘膜下腫瘍を腹腔外に反転させて切除する方法のため、潰瘍を伴わない病変が適応であり、現在は Classical LECS として呼称されている。

当院では Classical LECS の適応外である潰瘍を伴う粘膜下腫瘍や早期胃癌に対する LECS として、全層切開前に胃壁を糸で吊り上げる “Inverted LECS with Crown Methods”（以下 Crown 法）を報告している。(Nunobe S, et al. Gastric Cancer, 2012)

Crown 法は、経口内視鏡による粘膜切開後に腹腔鏡で粘膜切開線外側の複数ヶ所を糸でつりあげ、主に経口内視鏡で病変の全層切除を行う方法である。胃壁が吊り上げられることで、胃内容物の腹腔内漏出を予防できること、経口内視鏡で全層切除を行うため、より精密な切除線を決定できること、腹腔鏡での胃壁閉創において胃壁のオリエンテーションが付きやすいことなどの利点がある。これらの利点をふまえ、当院では従来 Classical LECS を施行していた胃粘膜下腫瘍に対しても、Crown 法を用いることが多くなっている。今回、この Crown 法の有用性について報告する。